

石井忠雄作 戦争ドラマスペシャル 「愛は死よりも強し」

< 前編 >

- (効果音) (戦時中のラジオニュース)
- 女友達 小野寺さん、あの本間さんが特高に捕まったんですって。
- 小野寺泰樹 本当かい？ 彼はずいぶんと反戦運動をやっていたからね。
- 女友達 ところで、あなたは大丈夫なの？ キリスト教の牧師さんもずいぶんと投獄されているっていうじゃないの。それにあなたのお父さん、教会の役員をやっていたんでしょう？
- 小野寺 うん。でも今じゃ父は軍関係の仕事をしてるし、町内の軍事教練にもずいぶん協力してるから。それに僕みたいなヒラ信徒は大丈夫だよ。
- 女友達 でも、本間さんだって普通の活動家よ。それでも捕まってしまうような時代なんだもの。
- 小野寺 ああ、戦争か…。「なんじ、殺すなかれ」って聖書は教えているけど、僕なんか戦争に行ったらどうすればいいんだろう。そこへ行くと、本間は偉いなあ。逮捕されるのを覚悟で反戦運動をやっていたんだからなあ。
- 泰樹ナレーション わたしの名は、小野寺泰樹。1925年(昭和元年)に生まれ、いわゆる“激動の昭和史”を始めからつぶさに味わってきた一人のクリスチャンです。毎年今ごろになると、あの悪夢のような戦争のことが思い出されます。わたしは、あの忌まわしい戦争の中で味わった、ある出来事によって、本当にクリスチャンとして生まれ変わったのです。
- あれは、太平洋戦争の戦局がいよいよ厳しくなった、1944年(昭和19年)、わたしが19歳の時でした。
- 小野寺 父さん、父さんはどうして軍なんか協力しているの？ 戦争が正しいと思っているの？
- 父 そりやお前、家のこと考えれば、そうせざるを得ないじゃないか。もしお父さんが、信仰の立場を貫いてみる。特高にしょっ引かれ、世間からお前たちまで白い目で見られ、家の中がメチャメチャだ。それに、今更父さん一人が反対しても始まんよ。
- 小野寺 父さんはそれでもクリスチャン？
- 父 お前はまだ若い。何も分かっていないんだ。そりや信仰も大切さ。だが、この戦争が終わらなければ、何をしてもダメさ。今はじっと耐える時代なんだよ。
- 小野寺 意気地なしだよ、父さんは！ 僕の友人の本間君は、クリスチャンじゃないけど、戦争に反対し、捕まったんだよ。それに多くの牧師先生たちだって、信仰のために投獄されている。教会の役員をやっていたくせに、父さんは卑きょう

だ！

父 何?! 黙れ！ お前みたいな青二才に何が分かるか！ 人の苦勞も知らないで。

(効果音) (「ガラ」と戸が開く音)

役人 小野寺さんはこちらですか？

母 はい、うちですが。

役人 泰樹さんはおりますか？

母 はい、おりますが、何か？

役人 おめでとうございます。お国のためのご奉公です。

母 は？ はい。

役人 決められた日までに入隊してください。では失礼します。

(間)

母 お父さん。泰樹に召集令状が。

父 何?! おかしいな、話が違うぞ。

小野寺 どうしたんですか、父さん？

父 うん。まじめに軍に協力していれば、お前が徴兵されないで済むと聞かされていたんだ。それにお前は体がそんなに丈夫じゃないしな。

小野寺 それでお父さんは…。でも、今はそんな時代じゃないんだ。僕の友人の伊藤も、あんな体で兵隊に取られたんだ。

父 泰樹、ここに来なさい。お父さんは謝る。お前の言うとおりで。お父さんは弱い人間だよ。で、お前はどうするんだ？ 戦地へ行くか、はっきり拒否するか、どっちにする？

小野寺 父さん、本当は僕も苦しいんだ。どっちにしたらよいか分からないんだ。

父 行くもよし、やめるもよし。家のことは考えるな。イエス様の導きに従って、確信のあるところに歩みなさい。ここに父さんの若いころ使った英語のポケット聖書がある。これをお前にあげよう。

ナレーション わたしは、その夜、一睡もできませんでした。「主よ、どちらにすべきですか？」と祈り続けました。

明け方、夢を見ました。薄暗い所に見たことのない人がいます。ほほえみながら何やら外国語を話しているのですが、わたしには理解できるような気がしたのです。そしてその時、マルコ8:34のみ言葉が頭に浮かんできました。「イエスは言われた。『だれでも、わたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについてきなさい。』」 わたしは、入隊する決心をしました。

兵士 (次のナレーションの背後で) 全たーい(体)、止まれ！ 気をつけー！ 中隊長殿に向かって、^{かしら}頭一、中！ 敬礼！

ナレーション 入隊後、わたしは衛生兵としての教育を受けました。“これで僕は、直接銃を取って人を殺さなくて済む”と思いました。しかし、初めに予期していたとおり、間もなくわたしの所属する部隊は、南方に送られました。わたしが送られたのはフィリピンのレイテ島。戦局は日に日に悪化し、アメリカ軍の艦砲射撃に、住民は山地に逃げ込んでしまいました。

(効果音) (ナレーションのバックに射撃、空襲音)

ナレーション ゲリラ活動が激しく、“フィリピン人は皆敵だ”と教えられました。そんなある日、ついに米軍が上陸を開始したのです。戦闘でわたしの中隊は多くの兵士を失い、弾薬も食糧も尽き、残った数人の者はジャングルの中に逃げ込んで、あてどなくさまよい歩きました。

野村中隊長 小野寺、貴様がヤソだというのは本当か？

小野寺 そうであります、中隊長殿。

中隊長 この辺りはヤソが多いそうだが、やつらは皆 敵だ。我々の所在が知れたらすぐ攻撃される。やつらを見つけ次第、殺せ。ヘンな同情をすると、貴様のドテッ腹に風穴が開くぞ。いいな。

小野寺 はい。

ナレーション わたしは、わたしのドテッ腹に風穴を開けるのは、フィリピン人なのか、日本人なのか、よく分かりませんでした。ただなんとなく、敵が凶暴な人間のような気がしていたのです。

兵士 あ、あそこに女がいるぞ！

中隊長 フィリピン人だ。捕らえろ！

兵士 逃げるぞ！

中隊長 追え！

小野寺 わたしも一緒に追いました。でも心の中では、そのフィリピン人がうまく逃げてくれることを願っていました。しかし、運悪くわたしは彼女と鉢合わせをしてしまったのです。2人は一瞬立ちすくみ、お互いを見つめ合いました。

小野寺 おい、向こうへ逃げろ。早く逃げるんだ。

ナレーション しかし彼女は、柔和にほほえみをもってわたしを見つめています。

小野寺 逃げないと殺されるぞ。

フィリピン牧師夫人 ナゼ、アナタハ、ワタシヲ殺サナイノデスカ？(以下、すべて片言調)

小野寺 僕は、人殺しは嫌いなんだ。

フィリピン牧師夫人 日本人は平気で人を殺します。どうぞわたしを殺してください。わたしはクリスチャンで、わたしのハズバンドは牧師です。

小野寺 牧師の奥さんですか。それならなおいけません。逃げてください。

フィリピン牧師夫人 どうしてですか？ わたしはイエス様を信じ、永遠の命を頂いています。だから平気です。あなたこそ生きてください。そしてイエス様を信じ、クリスチャンにな

ってください。わたしはあなたを救^{ゆる}します。わたしを殺さなければ、あなたは軍法会議にかけられ、殺されます。さあ、どうぞ。

ナレーション

そこへ中隊長たちも駆けつけました。

中隊長

小野寺、何をしておる！ そいつを早くやるんだ！

小野寺

奥様、早く逃げてください。

中隊長

小野寺、貴様は上官の言うことが聞けないのか?!

小野寺

イヤです。この方は敵なんかではありません。撃つのはやめてください。

中隊長

貴様、邪魔をするのか。構わぬ、撃て！

小野寺

奥さん、危ない！（銃の発射音「バーン」と同時に、かばった小野寺撃たれて）
あ！

フィリピン牧師夫人 兵隊さん！

ナレーション

弾は、わたしの右胸に命中しました。しかし、小銃の音で近くにいた米軍の兵士が駆けつけてきましたので、わたしの仲間は、わたしを残して逃げてしまいました。

牧師夫人

兵隊さん、しっかりしてください。おおジーザス。この方はわたしの身代わりとなって…。兵隊さん、死んではダメです。

小野寺

奥様。僕は小野寺といいます。僕の胸のポケットに聖書が入っています。どうぞ出してくださいませんか？

牧師夫人

聖書… バイブルですか？

小野寺

ええ、父からもらったものです。僕も、実はクリスチャンなのです。しかし、意気地のない信仰者でした。でも今、僕は本当の勇気を知りました。本当の勇気って、“愛”から生まれるものなんですね。奥様は僕のために命を投げ出そうとされました。僕は、頭の中では、イエス様が僕のために命を捨ててくださったことは分かっていた。でも僕は、今ほどイエス様の愛を強く感じたことはありませんでした。あなたが、それを教えてくださったのです。そのイエス様の前で、同じ主を信じているあなたを撃つことができるでしょうか。

牧師夫人

そうですね。もしあなたのお国の方々や、わたしたちの国の人々が、もっとイエス様の愛を知っていたなら、こんな戦争は起こらなかったでしょう。それに、あなたとこんな形でなく、もっと平和なうちに会い、楽しくお話ができたでしょう。残念です。

小野寺

奥様、お願いがあります。父の聖書で、ヨハネによる福音書 15 章 12 節と 13 節を読んでくださいませんか？

牧師夫人

ええ、いいですとも。

「My command is this: Love each other as I love you.. Greater love has no one than this, that one lay down his life for his friends.(途中からボイスオーバーで)人がその友のために命を捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持って

いません。」

ナレーション わたしは、彼女の声を聞きながら、いつしか気を失っていきました。薄れゆく意識の中で、わたしのまぶたには、その場に駆けつけたアメリカ軍兵士たちが、しばし頭^{こぶ}を垂れて、彼女の読む聖書の言葉に聴き入る姿が焼き付いていました。それは、生きとし生ける者が、イエス・キリストに在ってのみ持ち得る、和解と平和の姿でした。

< 中編 >

ナレーション ふと目を開けると、くすんだ緑色の空が見えます。わたしは、まどろみから急に覚めたときのように、自分が今、どこにいるのか分かりませんでした。しかし、時間がたつに連れ、空だと思った緑色は、テントの屋根であることが分かってきました。

看護婦 気がついたようね。

小野寺 あなたは？ ここはどこ？

看護婦 あなたは、アメリカ軍の病院に収容されているのです。胸の傷は、幸い弾が心臓をそれていたの、あなたは助かったのです。わたしは看護婦です。

小野寺(モノローグ) そうだった。わたしは中隊長に撃たれたんだ。それで、ここに連れられてきたのか。...するとわたしは捕虜、ここにいるのはみんな敵だ！

米軍士官 ヘイ、ユー。名前とランク... あー、階級を教えてください。

ナレーション 声をかけたのは、二世の若い将校でした。

小野寺 名前は小野寺泰樹。陸軍二等兵です。

士官 間違いありません？ このレイディーがあなたに聞きたいことがあります。

フィリピン女性 あなたは、ペペという二十歳の男の人、知りませんか？ わたしの息子です。

小野寺 さあ、よく分かりませんが。

士官 その人は殺されました。このレイディーは、自分の息子を殺した日本兵を探しているのです。

フィリピン女性 わたしの息子は、無理やりに日本兵の道案内に連れていかれました。でも、それっきり帰ってきませんでした。一生懸命探したら、息子は、川のそばで撃たれて死んでいるのが見つかりました。どうしてあなたがたは、そんなひどいことをするのですか？ 人の国に勝手に入り込んできて！ わたしの息子、どんな悪いことしましたか？

小野寺 奥さん、申し訳ありません。わたしは、直接見たことはありません。もちろん、自分で殺したこともありません。しかし、道案内に使ったフィリピン人を殺した話は、何度か聞き、わたしの舞台でもそういうことを行っていることは知っていました。

フィリピン女性 どうしてです？ 教えてください。わたしは日本兵が憎い。息子を返してください。

い！ 息子を返して！（泣き崩れる）

ナレーション わたしを激しくたたきながら泣き叫ぶ母親の前に、わたしは何も言えませんでした。その手が傷口に当たるたびに、全身に走る痛みは、神様からのムチのように思えました。

(音楽) (重苦しい感じ)

ナレーション ほどなくわたしは、日本が無条件降伏をして、あの忌まわしい戦争が終わったことを、ベッドの上で聞かされました。1 か月ほどして、やっと病院の庭を歩けるようになったころ、わたしは思いがけない人に出会いました。

小野寺 あ、中隊長ではありませんか。

ナレーション 捕虜になってから始めてあった日本人、それはあの野村中隊長だったので。

中隊長 さて、だれだったかな？

小野寺 え？ 自分は小野寺です。ほら、小野寺二等兵ですよ。あのフィリピンの奥さんをかばって、あなたに撃たれ…。

ナレーション そこでわたしは、息をのみました。わたしを殺そうとした人間が、今、目の前にいる。わたしの心は複雑な思いで満たされました。しかし、表面では平静を装って

小野寺 中隊長、自分は、中隊長が自分を撃ったことを恨んではいません。どうぞ安心してください。

隊長 わたしが君を撃った？ ふん、知らんな。そんなこと、身に覚えはないよ。人違いだろ。

小野寺 中隊長！

士官 ミスター小野寺、あなたは、彼を知っているのですか？ あなたの上官ですか？

小野寺 はい、確かにそうです。しかし、中隊長はわたしのことを知らないと…。

士官 そうですか。彼は、自分のことを陸軍上等兵だと言っています。わたしたちは、あなた方の部隊が行った、フィリピン人の民間人虐殺について調査をしています。彼が士官なら、その責任を負わなければなりません。

ナレーション わたしはハッとしました。中隊長のげげんな言動の意味が分かったからです。それ以来、彼の姿を病院で見ることはできなくなりました。

士官 ミスター小野寺、あなたの上官は、今裁判にかけられています。あなたは、彼のやったことを知っていますね？

小野寺 え？ い、いいえ。

士官 ウソをついてはいけません。彼の行ったことの証人は、たくさんいます。我々は、彼のやったことのすべてを明らかにしなければなりません。あなたにも、証人として法廷に立ってもらいます。

小野寺 いいえ、わたしにはできません。わたしは、実際は何も見えていません。
士官 ミスター小野寺、わたしはあなたがクリスチャンであることを知っています。わたしもクリスチャンです。ですから言います。神の正義を曲げてはいけません。神は、そのことを喜びません。わたしたちは、あなたが、あの中隊長に撃たれたことを知っているのです。悪は裁かなければなりません。これは命令です。

小野寺 ...分かりました。わたしはなんだか同胞を売るようで気持ちがよくありません。しかし、神の前でウソをつくことはできません。わたしが知っている限りのことを話します。

ナレーション その時、わたしの中には激しい葛藤^{かつとう}があったのです。しかし、自分に銃を向けた人間に対する憎しみに似た気持ちがどこかにあって、「お前は正しいことをするんだ。何を恐れているのか？」とささやいていました。こうして、裁判の日がやってきました。

(効果音) (裁判長のたたく槌^{つち}の音)
裁判長 証人は前に出なさい。神に誓って真実を証言するように。あなたは、中隊長から、フィリピン人の民間人を殺すよう命令されていませんか？

小野寺 はい。
裁判長 どうしてですか？
小野寺 「彼らは敵だから」と言われていました。
裁判長 彼らは武装していましたか？
小野寺 いいえ。
裁判長 彼らは抵抗しましたか？
小野寺 いいえ。(FO)

ナレーション わたしは、自分で何を答えているのか分かりませんでした。頭の中が空っぽになったようでした。ふと気がつくと、判決が下されようとしていました。

(効果音) (槌の音)
裁判長 ただいまの証人の証言に基づき、判決を言い渡す。被告人、野村忠一を、死刑に処す。

ナレーション その時です。
フィリピン牧師夫人 ちょっと待ってください！

ナレーション 傍聴席を振り向いたわたしは、驚きで息が止まるかと思いました。それは、あの山の中で会った、フィリピン人の牧師夫人だったのです。

<後編>
牧師夫人 裁判長、除名嘆願書をまとめてきました。この村の村長もサインしてます。どうぞあの人を死刑にしないでください。お願いします。

裁判長 どうしてです？ あなたはあの男にひどい目に遭わされた一人ではないですか。

牧師夫人 そうです。わたしは彼によって乱暴され、わたしの夫と子供たちは、わたしの見ている前で、彼の兵士に刺し殺されました。わたしも始めは彼を憎みました。いつか復讐^{ふくしゅう}をしようと誓ったのです。でも、彼を憎めば憎むほど、わたしの心は苦しくなりました。主イエスが、「それでいいのか？」と心の中で何度も聞くのです。祈りの中で、わたしは気がつきました。悪に悪でこたえても、何も解決しない。確かにわたしの国は、日本人にひどい目に遭いました。でも、わたしたちも、戦争だからと言って、多くの日本人を殺しました。殺さなければ殺されるからです。これは本当に地獄でした。その原因は、人間の“罪”です。聖書の言う、“自分だけが正しい”と思うエゴイズムです。この罪がある限り、日本人も、アメリカ人も、フィリピン人も、だれでも人殺しになるでしょう。(間)

わたしは、イエス様のことを一生懸命思いました。イエス様は、こんなに汚い人間を心から愛して、身代わりに命を捨ててくださいました。わたしは、このイエス様の前で人を裁くことはできません。どうぞ、彼の命を助けてください。お願いします。(涙声)

ナレーション わたしは、泣きながら必死に訴える彼女の言葉に、頭をガーンと棒で殴られたような衝撃を受けました。わたしの赦^{ゆる}しは、口先だけのものでした。わたしは心のどこかで、中隊長を憎んでいた。しかしこの夫人はどうだ！ 人は、自分を憎む者のために命を捨てたイエスの愛に触れて、初めて人を赦せるのだという事実を、わたしは目の当たりに見た思いでした。

それから数か月後、わたしは傷もいえて、日本に帰国することになりました。その間際まで、死刑の宣告を受けたあの中隊長の消息を、わたしは知りませんでした。しかし心の中では、自分の証言で中隊長が死刑になったという思いが、ずーっと離れませんでした。いよいよ明日は帰国というその日、あのフィリピンの牧師夫人、レニさんといいましたが、彼女が訪ねてきました。

牧師夫人 小野寺さん、いよいよサヨナラですね。あなたが日本に帰っても、わたしはあなたのために祈ります。わたしたち、主イエスに在って兄弟姉妹ですものね。

小野寺 ありがとうございます。わたしは、あなたに多くのことを学びました。

牧師夫人 小野寺さん、あなたの上官、野村さんはやっぱり死刑になりました。1週間前のことです。わたしの力が足りなかった。ごめんなさい。

小野寺 そうですか…。わたしが彼を訴えたようなものです。わたしの証言が、彼を死に追いやったのだ。わたしは、神の正義のためと思って証言台に立ちました。でもあの時、わたしの心の中にあったのは、あなたを殺そうとし、そしてわたしを撃ったあの人への憎しみでした。わたしも彼と同じ罪びとです。わたしこそ死刑にならなければならなかったのです。(おえつ)

牧師夫人 小野寺さん、自分を責めないでください。すべては神様のプラン、あー、み心です。あなたが生かされたのは、神様の計画があるからです。日本に帰って、多くの人に、この事実を、そしてイエス様の愛を知らせることで。小野寺さん、これは野村さんが死ぬ前にあなたに書いた手紙です。どうぞ読んでください。

ナレーション そう言って渡されたのは、中隊長の遺書でした。

野村中隊長 (小野寺の読む声から、中隊長の声に)小野寺、これは、わたしがこの地上で書く最後の手紙だ。いよいよ明日は死刑が執行される。これも、わたしが犯した罪の報いだ。人はそのまいたものを刈り取らねばならない。しかしわたしは今、神のみもとに行けることを喜んでいる。わたしは確かに牧師夫人を辱め、ご家族を殺し、多くの現地人の方々を、“戦争”の名の下に殺害した。たとえこの身を死に渡しても、その罪は償えまい。だが夫人は、わたしのために必死に働いてくれた。このわたしのような罪びとのためにだ。わたしは初め、彼女が自分の名誉のためにやっているのではないかと思った。だが、あの判決の日の彼女の言葉を聞いた時、わたしの目は開かれた思いがした。彼女を動かしていたのは、神の愛、キリストの愛だったのだね。わたしはあれから、彼女が差し入れてくれた聖書をむさぼるように獄中で読んだ。そして、ローマ書の5章6節からのところを読んだ時、キリストは、このわたしのために命を捨ててくださったことが、はっきりと分かったのだ。小野寺、今、わたしの心は平安だ。いや、喜びでいっぱいだ。明日、わたしのこの罪の体は灰になる。しかし、わたしは天国で、君や、夫人に会えるのだ。ご主人にも赦していただけるだろう。君がわたしを訴えたことで苦しんでいることを夫人から聞いたが、それは無用だよ。わたしのほうこそ、君にしたすべてのことを、主に在って赦してくれたまえ。そして、国に帰ったら、どうか家族に、わたしを救ったこのみ言葉と共に、わたしの最期を知らせてほしい。そして愛する日本の人々に、もう二度と愚かな戦争をしないように、キリストの愛を込めて知らせてほしい。

さようなら、また会う日まで。 野村忠一

私たちがまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔^{はいげん}な者のために死んでくださいました。

正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。

しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼の地によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解

させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。

そればかりでなく、私たちのために今や和解を成り立たせてくださった私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。

(ローマ書 5 章 6 - 11 節)

< 辞世 >

キリストのしもべとなりて帰りゆかむ

罪のこの身はちりと消ゆとも

< 完 >